

2014年4月9日

民主党 暮らしを守る研究会

「少子化・人口減少の影響、及び対応策等について」

明治大学政治経済学部 教授
明治大学附属明治高等学校・明治中学校 校長
日本人口学会 会長

安藏 伸治 (anzo@meiji.ac.jp)

- I わが国の少子化の推移
- II 少子化の原因
- III 家族の変化
- IV 「いい人」がない
- V 結婚市場への対応
- VI 求められる少子化対策

I わが国の少子化の推移

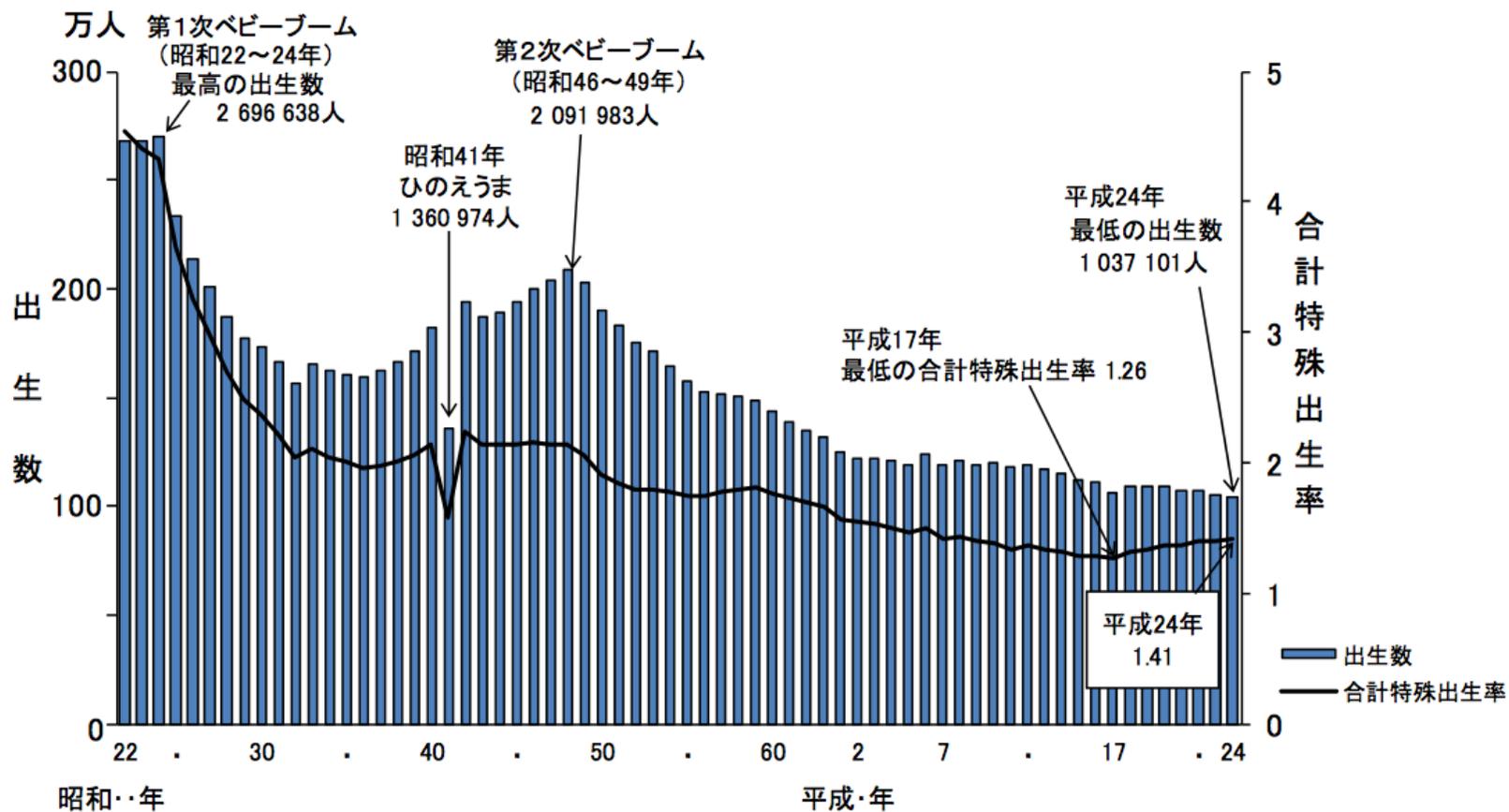


図1 出生数及び合計(特殊)出生率の年次推移

(出所) 大臣官房統計情報部人口動態・保健社会統計課編 2013年『平成24年 人口動態統計月報年計(概数)の概況』4頁。

表1 母の年齢(5歳階級)別にみた出生数の年次推移

母の年齢	出生数				対前年増減		
	平成21年	平成22年	平成23年	平成24年	22年-21年	23年-22年	24年-23年
総数	1 070 035	1 071 304	1 050 806	1 037 101	1 269	△ 20 498	△ 13 705
～14歳	67	51	44	59	△ 16	△ 7	15
15～19	14 620	13 495	13 274	12 711	△ 1 125	△ 221	△ 563
20～24	116 808	110 956	104 059	95 803	△ 5 852	△ 6 897	△ 8 256
25～29	307 765	306 910	300 384	292 440	△ 855	△ 6 526	△ 7 944
30～34	389 793	384 385	373 490	367 651	△ 5 408	△ 10 895	△ 5 839
35～39	209 706	220 101	221 272	225 443	10 395	1 171	4 171
40～44	30 566	34 609	37 437	42 028	4 043	2 828	4 591
45～49	684	773	802	928	89	29	126
50歳以上	20	19	41	32	△ 1	22	△ 9

注：総数には母の年齢不詳を含む。

出典：大臣官房統計情報部人口動態・保健社会統計課編 2013年『平成24年人口動態統計月報年計(概数)の概況』5頁。

表 2 合計特殊出生率の年次推移(年齢階級別内訳)

年 齢	合 計 特 殊 出 生 率							対前年増減		
	昭和60年	平成7年	17	21	22	23	24	22年-21年	23年-22年	24年-23年
総 数	1.76	1.42	1.26	1.37	1.39	1.39	1.41	0.02	0.00	0.02
15～19 歳	0.0229	0.0185	0.0253	0.0249	0.0232	0.0227	0.0219	△ 0.0017	△ 0.0005	△ 0.0008
20～24	0.3173	0.2022	0.1823	0.1779	0.1781	0.1710	0.1607	0.0002	△ 0.0071	△ 0.0103
25～29	0.8897	0.5880	0.4228	0.4320	0.4356	0.4349	0.4326	0.0036	△ 0.0007	△ 0.0023
30～34	0.4397	0.4677	0.4285	0.4756	0.4789	0.4837	0.4915	0.0033	0.0048	0.0078
35～39	0.0846	0.1311	0.1761	0.2217	0.2318	0.2390	0.2525	0.0101	0.0072	0.0135
40～44	0.0094	0.0148	0.0242	0.0354	0.0387	0.0408	0.0448	0.0033	0.0021	0.0040
45～49	0.0003	0.0004	0.0008	0.0009	0.0010	0.0011	0.0012	0.0001	0.0001	0.0001

注：年齢階級別の数値は各歳別出生率を合計したものであり、15歳及び49歳にはそれぞれ14歳以下、50歳以上を含んでいる。

出典：大臣官房統計情報部人口動態・保健社会統計課編 2013年『平成24年 人口動態統計月報年計(概数)の概況』6頁。

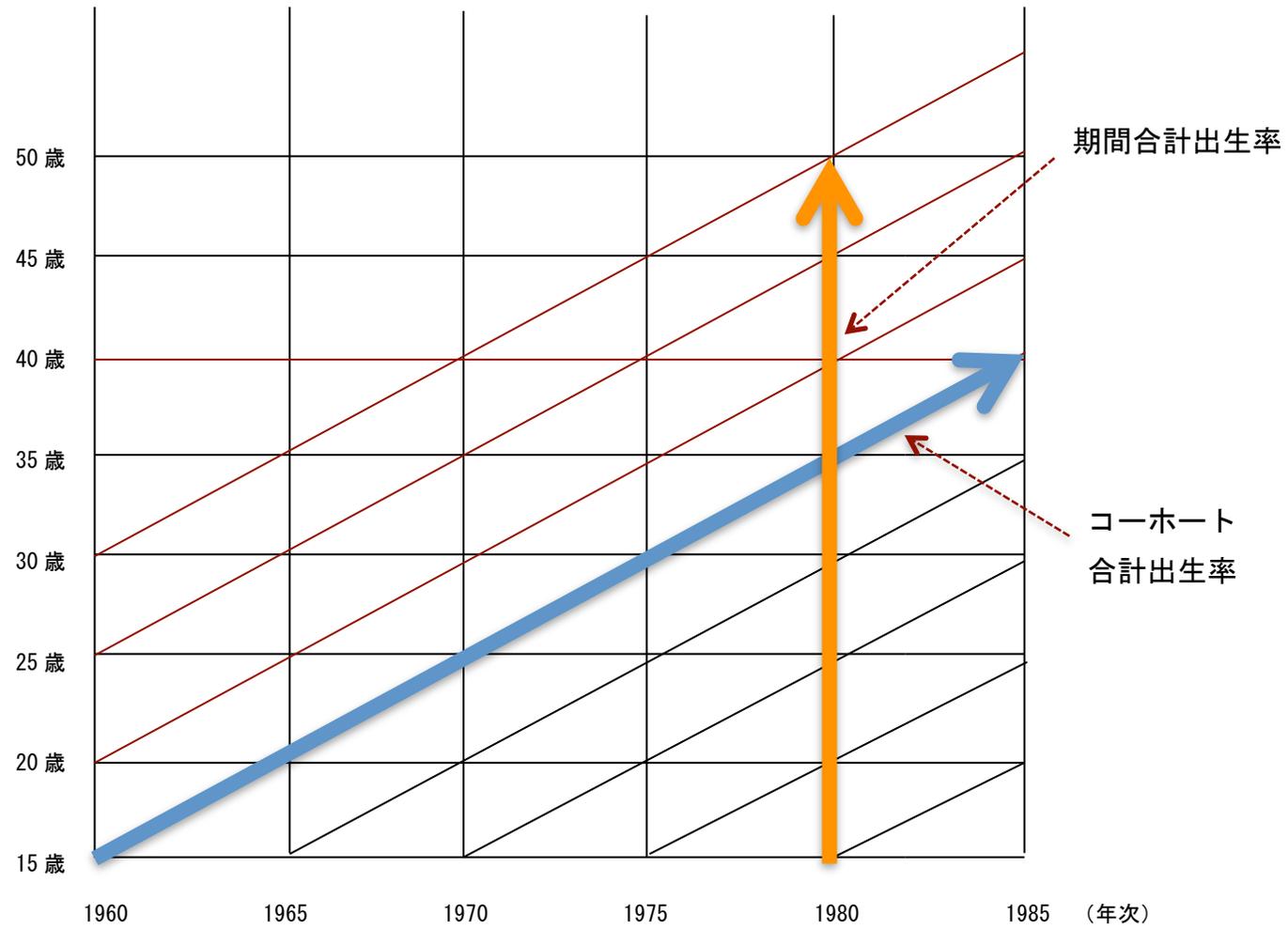


図2 期間合計出生率とコーホート合計出生率の関係

表3 女性のコーホート別累積出生率：1950～2005年

年齢	1950年	1955年	1960年	1965年	1970年	1975年	1980年	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年
15	0.00032	0.00008	0.00006	0.00005	0.00012	0.00005	0.00006	0.00013	0.00012	0.00019	0.00033	0.00036
16	0.00143	0.00053	0.00043	0.00031	0.00043	0.00047	0.00062	0.00083	0.00078	0.00097	0.00188	0.00167
17	0.00518	0.00221	0.00206	0.00185	0.00223	0.00212	0.00285	0.00296	0.00286	0.00371	0.00623	0.00506
18	0.01462	0.00753	0.00751	0.00686	0.00807	0.00657	0.00880	0.00795	0.00760	0.00961	0.01364	0.01203
19	0.03485	0.02115	0.02163	0.01979	0.02243	0.01722	0.02180	0.01866	0.01870	0.02250	0.02819	0.02499
20	0.07519	0.05102	0.05416	0.04945	0.05043	0.03897	0.04336	0.03739	0.03703	0.04410	0.04891	0.04442
21	0.14343	0.10627	0.10526	0.10706	0.10004	0.07760	0.07647	0.06684	0.06417	0.07406	0.07793	0.07030
22	0.24196	0.20203	0.21340	0.20907	0.17819	0.13978	0.12342	0.10702	0.10083	0.11218	0.11365	
23	0.39044	0.34408	0.37236	0.36555	0.29606	0.23397	0.19010	0.16041	0.14936	0.15731	0.15855	
24	0.56941	0.52906	0.58131	0.56798	0.45418	0.36554	0.27856	0.23394	0.21011	0.21162	0.21212	
25	0.76780	0.74661	0.82016	0.78424	0.63982	0.52395	0.38718	0.32132	0.28580	0.27578	0.27743	
26	0.96882	0.90644	1.06710	1.00032	0.83853	0.69905	0.51578	0.42521	0.37339	0.35321	0.35491	
27	1.16269	1.12819	1.29921	1.20094	1.03688	0.87865	0.65465	0.53864	0.46973	0.44148		
28	1.34101	1.31813	1.50460	1.38125	1.22316	1.05185	0.79385	0.65876	0.57199	0.53993		
29	1.49630	1.47999	1.66888	1.53309	1.39015	1.20477	0.93515	0.77679	0.67830	0.64520		
30	1.63135	1.61155	1.78786	1.65360	1.52837	1.34048	1.05917	0.88999	0.78002	0.75092		
31	1.70612	1.71390	1.87503	1.74686	1.63818	1.45466	1.17165	0.99141	0.88126	0.85545		
32	1.79191	1.79163	1.94001	1.82080	1.72554	1.54821	1.26659	1.08081	0.97635			
33	1.85592	1.85194	1.98836	1.87904	1.79458	1.62300	1.34668	1.15813	1.06380			
34	1.90360	1.89226	2.02292	1.92346	1.84621	1.68474	1.41050	1.22526	1.14275			
35	1.93796	1.91778	2.04743	1.95545	1.88546	1.73075	1.46317	1.28088	1.21259			
36	1.96261	1.93521	2.06566	1.97909	1.91452	1.76714	1.50460	1.32914	1.27220			
37	1.97917	1.94664	2.07853	1.99551	1.93545	1.79300	1.53495	1.36816				
38	1.99107	1.95469	2.08811	2.00724	1.94976	1.81179	1.55765	1.39920				
39	1.99844	1.96003	2.09473	2.01527	1.96044	1.82465	1.57428	1.42318				
40	2.00288	1.96349	2.09897	2.02055	1.96712	1.83356	1.58506	1.44034				
41	2.00550	1.96568	2.10163	2.02378	1.97131	1.83901	1.59237	1.45175				
42	2.00706	1.96707	2.10314	2.02566	1.97371	1.84229	1.59703					
43	2.00792	1.96782	2.10405	2.02668	1.97506	1.84403	1.59961					
44	2.00832	1.96822	2.10445	2.02726	1.97575	1.84493	1.60092					
45	2.00852	1.96839	2.10461	2.02748	1.97606	1.84537	1.60146					
46	2.00859	1.96845	2.10469	2.02757	1.97619	1.84552	1.60170					
47	2.00862	1.96847	2.10472	2.02761	1.97624	1.84560						
48	2.00864	1.96848	2.10473	2.02763	1.97627	1.84563						
49	2.00864	1.96849	2.10474	2.02765	1.97631	1.84568						

国立社会保障・人口問題研究所『人口問題研究』による。表4-10の出生率を累積したものの。

出典：国立社会保障・人口問題研究所編 2013年『人口統計資料集 2013年度版』。

II 少子化の原因

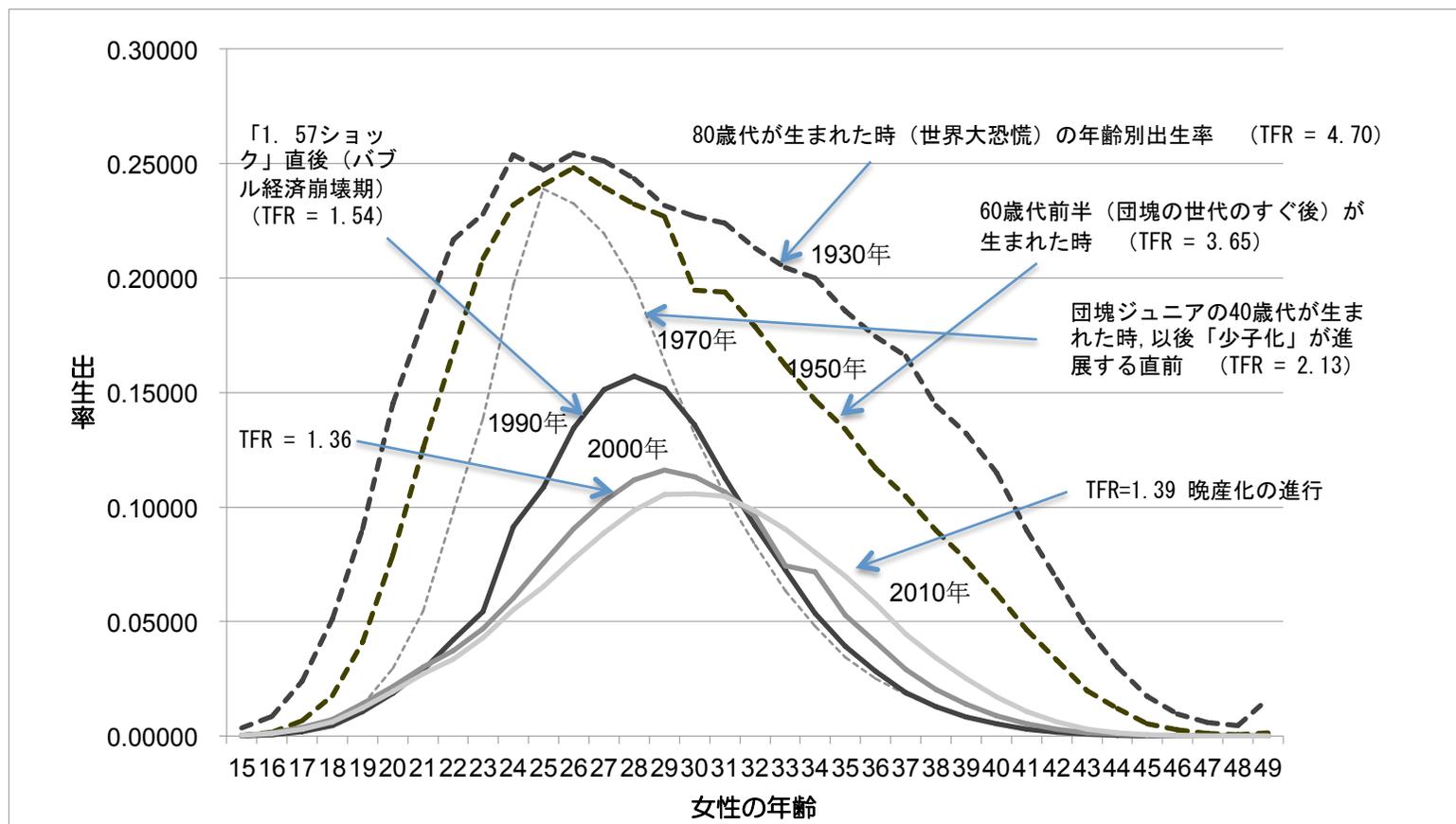


図3 年齢別出生率の推移：1930年，1950年，1970年，1990年，2000年および2010年

年齢別出生率 = ある年齢の女性から生まれた子ども数 ÷ その年齢の女性人口（× 1,000）

出所：国立社会保障・人口問題研究所，『人口統計資料集 2013』より作成。

表4 嫡出でない子の出生数および割合：1925～2011年

年次	嫡出でない子	割合(%)	年次	嫡出でない子	割合(%)	年次	嫡出でない子	割合(%)
1925	151,448	7.26	1968	17,999	0.96	1990	13,039	1.07
1930	134,221	6.44	1969	17,510	0.93	1991	13,592	1.11
1940	86,820	4.10	1970	17,982	0.93	1992	13,738	1.14
1947	101,580	3.79	1971	17,278	0.86	1993	13,665	1.15
1950	57,789	2.47	1972	17,724	0.87	1994	14,716	1.19
1951	46,859	2.19	1973	17,730	0.85	1995	14,718	1.24
1952	39,622	1.98	1974	16,547	0.82	1996	15,453	1.28
1953	35,036	1.88	1975	15,266	0.80	1997	16,659	1.40
1954	30,899	1.75	1976	14,207	0.78	1998	17,204	1.43
1955	29,018	1.68	1977	13,812	0.79	1999	18,280	1.55
1956	25,895	1.55	1978	13,164	0.77	2000	19,436	1.63
1957	23,429	1.50	1979	12,857	0.78	2001	20,369	1.74
1958	23,051	1.39	1980	12,548	0.80	2002	21,631	1.87
1959	21,649	1.33	1981	13,201	0.86	2003	21,634	1.93
1960	19,612	1.22	1982	13,076	0.86	2004	22,156	1.99
1961	18,438	1.16	1983	13,862	0.92	2005	21,533	2.03
1962	17,962	1.11	1984	14,747	0.99	2006	23,025	2.11
1963	17,427	1.05	1985	14,168	0.99	2007	22,170	2.03
1964	17,229	1.00	1986	13,398	0.97	2008	22,972	2.11
1965	17,452	0.96	1987	13,138	0.98	2009	22,860	2.14
1966	15,523	1.14	1988	13,324	1.01	2010	22,986	2.15
1967	16,977	0.88	1989	12,826	1.03	2011	23,354	2.22

厚生労働省統計情報部『人口動態統計』による。1947～72年は沖縄県を含まない。割合は、出生総数に対するもの。

出典：国立社会保障・人口問題研究所編 2013年『人口統計資料集 2013年度版』。

表 5 有配偶女性の年齢（5歳階級）別出生率：1930～2010年

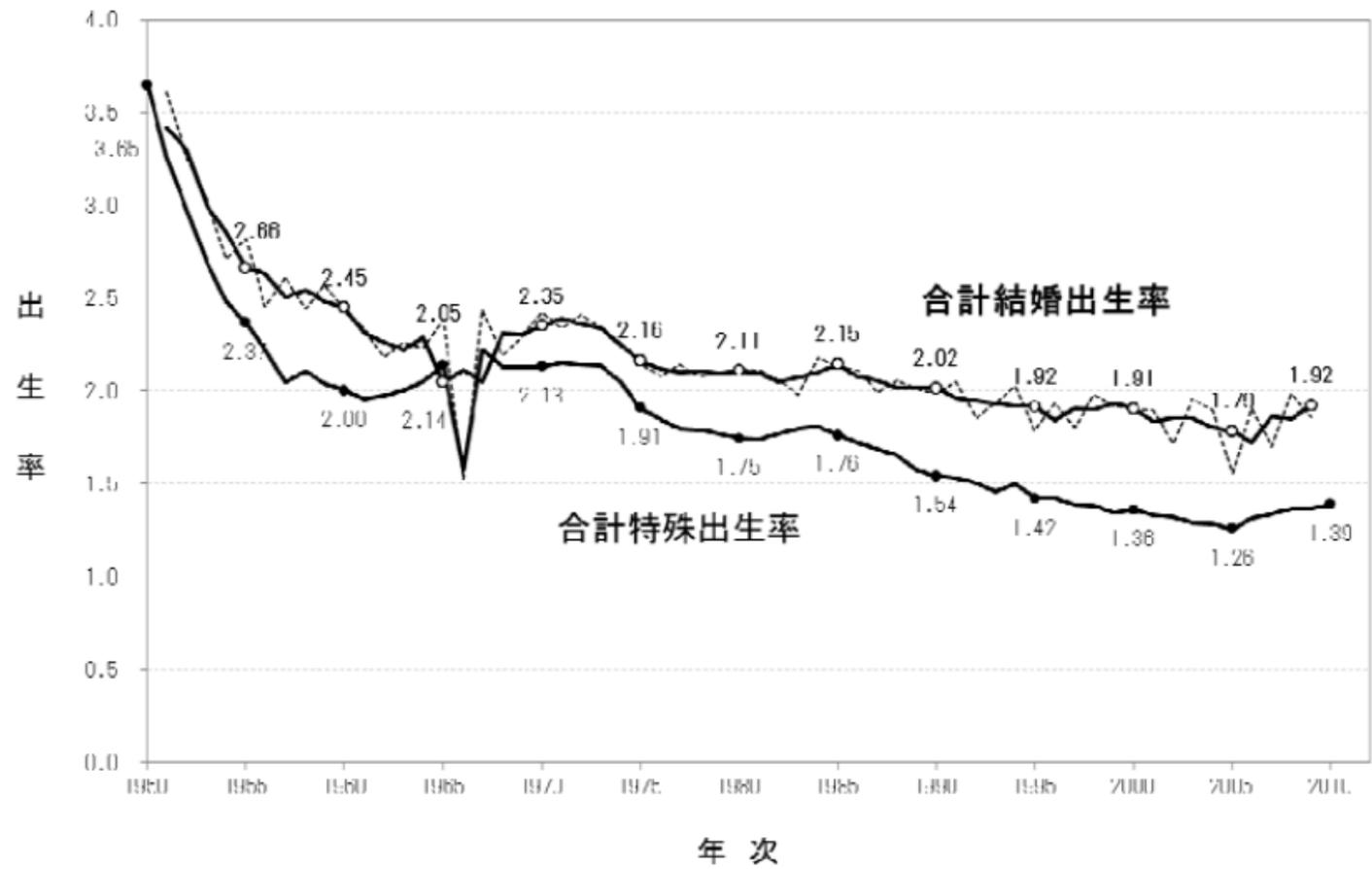
年齢	1930年	1950年	1960年	1970年	1975年	1980年	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年	2010年
15～19	337.7	408.0	321.9	245.8	305.6	384.3	480.6	497.9	627.3	674.2	698.0	814.1
20～24	336.4	376.3	341.7	346.4	349.9	352.1	344.4	332.1	326.1	359.7	363.5	386.1
25～29	280.4	298.6	237.2	258.9	242.9	243.3	262.3	241.8	233.8	230.1	225.4	239.2
30～34	235.9	209.6	92.7	95.0	77.1	82.9	99.2	112.3	123.4	136.0	136.7	157.3
35～39	181.0	126.3	27.8	22.0	16.4	14.3	19.9	23.7	30.8	40.2	49.1	66.3
40～44	83.6	43.7	6.4	3.1	2.4	1.9	2.0	2.7	3.3	4.6	6.4	11.1
45～49	13.6	2.9	0.5	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.2	0.3
15～49 ¹⁾	208.8	187.5	108.7	104.5	93.4	77.8	73.3	66.0	68.6	76.7	74.9	79.4

1930年は内閣統計局『日本帝国人口動態統計』，1950年以降は厚生労働省統計情報部『人口動態統計』および総務省統計局『国勢調査報告』により算出。

1950～70年は沖縄県を含まない。分母人口は1975年以前の年次は総人口を，80年以降は日本人人口。年齢および配偶関係不詳は按分して用いた。

1) 再生産年齢有配偶女性人口についての出生率で，年齢別有配偶出生率の平均的な指数。

出典：国立社会保障・人口問題研究所編 2013年『人口統計資料集 2013年度版』。



注：合計結婚出生率の破線グラフは各年値、実線グラフは3年移動平均値を示す。第7回調査(1977年)～第14回調査(2010年)を合わせて集計。合計特殊出生率は「人口動態統計」による。グラフ上の数値は1955年から5年毎の合計結婚出生率3年移動平均値と合計特殊出生率の値を示す(ただし合計結婚出生率の最新数値は2009年の値)。合計結婚出生率については、巻末「用語の解説」参照。全数値は付表2(巻末)参照。

図4 合計結婚出生率と合計特殊出生率の推移

出典：国立社会保障・人口問題研究所編 2012年 『第14回出生動向基本調査 結婚と出産に関する全国調査 夫婦調査の結果概要』6頁。

表 6 調査別にみた、結婚持続期間別、平均理想子ども数と平均予定子ども数

(1) 平均理想子ども数

結婚 持続期間	第7回調査 (1977年)	第8回調査 (1982年)	第9回調査 (1987年)	第10回調査 (1992年)	第11回調査 (1997年)	第12回調査 (2002年)	第13回調査 (2005年)	第14回調査 (2010年)
0～4年	2.42人	2.49	2.51	2.40	2.33	2.31	2.30	2.30
5～9年	2.56	2.63	2.65	2.61	2.47	2.48	2.41	2.38
10～14年	2.68	2.67	2.73	2.76	2.58	2.60	2.51	2.42
15～19年	2.67	2.66	2.70	2.71	2.60	2.69	2.56	2.42
20年以上	2.79	2.63	2.73	2.69	2.65	2.76	2.62	2.58
総数 (客体数)	2.61人 (8,314)	2.62 (7,803)	2.67 (8,348)	2.64 (8,627)	2.53 (7,069)	2.56 (6,634)	2.48 (5,634)	2.42 (6,490)

(2) 平均予定子ども数

結婚 持続期間	第7回調査 (1977年)	第8回調査 (1982年)	第9回調査 (1987年)	第10回調査 (1992年)	第11回調査 (1997年)	第12回調査 (2002年)	第13回調査 (2005年)	第14回調査 (2010年)
0～4年	2.08人	2.22	2.28	2.14	2.11	1.99	2.05	2.08
5～9年	2.17	2.21	2.25	2.18	2.10	2.07	2.05	2.09
10～14年	2.18	2.18	2.20	2.25	2.17	2.10	2.06	2.01
15～19年	2.13	2.21	2.19	2.18	2.22	2.22	2.11	1.99
20年以上	2.30	2.21	2.24	2.18	2.19	2.28	2.30	2.23
総数 (客体数)	2.17人 (8,129)	2.20 (7,784)	2.23 (8,024)	2.18 (8,351)	2.16 (6,472)	2.13 (6,564)	2.11 (5,603)	2.07 (6,462)

注：対象は妻の年齢50歳未満の初婚どうしの夫婦。予定子ども数は現存子ども数と追加予定子ども数の和として算出。総数には結婚持続期間不詳を含む。

設問 理想子ども数：「あなた方ご夫婦にとって理想的な子どもの数は何人ですか。」。(追加)予定子ども数：「あなた方ご夫婦の今後のお子さんの予定についておたずねします。(1)お子さんの数と、(2)希望の時期について、あてはまる番号に○をつけてください。」

出典：国立社会保障・人口問題研究所編 2012年 『第14回出生動向基本調査 結婚と出産に関する全国調査 夫婦調査の結果概要』7頁。

- ・ 図3の年齢別出生率は、「分子」に「ある年齢の女性から生まれた子ども」
「分母」に「ある年齢の女性人口」

↑

独身者と有配偶者を含む

わが国では、表4で見るように「嫡出でない子の出生割合」は全出生の2%と低い。

つまり、実質的な出生は、「結婚している女性が生んだ子」と「結婚している女性人口（有配偶女性）」からなりたっている。

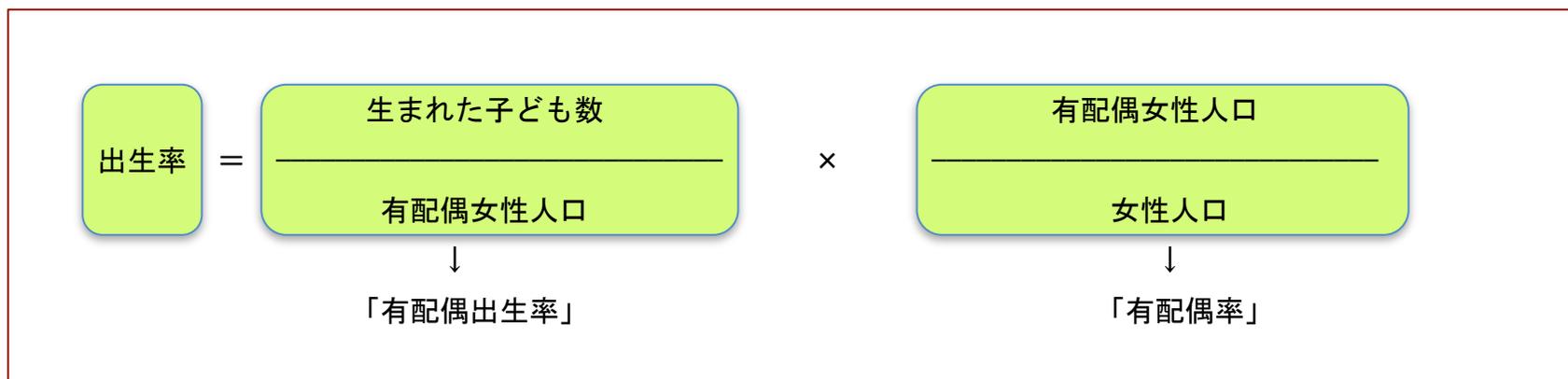


表5ならびに図4をみるとわが国の「有配偶出生率」に大きな変化は見られない。

表6から、夫婦の「理想子ども数」と「予定子ども数」も変化していない。

上記の式の前項に変化がないとすると、「出生率」の低下は第2項の「有配偶率」の変化が影響していることとなる。

表7 女性の年齢（5歳階級）別未婚者割合：1920～2010年

年 齢	1920年	1930年	1950年 ¹⁾	1960年 ¹⁾	1970年	1980年	1990年	1995年	2000年	2005年	2010年
総 数 ²⁾	18.7	21.2	25.7	26.9	24.9	20.9	23.6	24.1	23.9	23.4	23.3
15～19	82.3	89.3	96.6	98.6	97.9	99.0	99.3	99.3	99.1	99.2	99.4
20～24	31.4	37.7	55.3	68.3	71.7	77.8	86.0	86.8	88.0	88.7	89.6
25～29	9.2	8.5	15.2	21.6	18.1	24.0	40.4	48.2	54.0	59.1	60.3
30～34	4.1	3.7	5.7	9.4	7.2	9.1	13.9	19.7	26.6	32.0	34.5
35～39	2.7	2.4	3.0	5.5	5.8	5.5	7.5	10.1	13.9	18.7	23.1
40～44	2.1	1.8	2.0	3.2	5.3	4.4	5.8	6.8	8.6	12.2	17.4
45～49	1.9	1.6	1.5	2.1	4.0	4.5	4.6	5.6	6.3	8.3	12.6
50～54	1.7	1.4	1.2	1.7	2.7	4.4	4.1	4.6	5.3	6.2	8.7
55～59	1.5	1.3	1.2	1.3	2.0	3.5	4.2	4.1	4.3	5.3	6.5
60～64	1.4	1.1	1.2	1.1	1.6	2.4	4.2	4.2	3.9	4.3	5.5
65～69	1.4	1.0	1.3	1.0	1.3	1.7	3.4	4.2	4.0	3.8	4.5
70～74	1.4	0.9	1.3	1.0	1.1	1.3	2.3	3.4	4.0	3.9	4.0
75～79	1.4	0.8	1.5	1.1	1.1	1.0	1.7	2.3	3.3	4.0	4.0
80～84	1.3	0.7	} 1.2	1.0	1.0	0.9	1.3	1.7	2.3	3.2	4.1
85歳以上	1.4	0.7		0.9	1.0	0.7	1.0	1.4	1.6	2.1	2.9

総務省統計局『国勢調査報告』による。年齢別人口(配偶関係不詳を除く)に占める割合。1)沖縄県を含まない。2)15歳以上。

出典：国立社会保障・人口問題研究所編 2013年『人口統計資料集 2013年度版』。

表 8 男性の年齢（5歳階級）別未婚者割合：1920～2010年

年 齢	1920年	1930年	1950年 ¹⁾	1960年 ¹⁾	1970年	1980年	1990年	1995年	2000年	2005年	2010年
総 数 ²⁾	29.3	32.3	34.3	34.8	32.4	28.6	31.4	32.3	32.1	32.0	31.9
15～19	97.2	99.0	99.5	99.8	99.3	99.7	99.7	99.7	99.5	99.6	99.7
20～24	70.9	79.6	82.9	91.6	90.1	91.8	93.6	93.3	92.9	93.5	94.0
25～29	25.7	28.7	34.5	46.1	46.5	55.2	65.1	67.4	69.4	71.4	71.8
30～34	8.2	8.1	8.0	9.9	11.7	21.5	32.8	37.5	42.9	47.1	47.3
35～39	4.1	3.9	3.2	3.6	4.7	8.5	19.1	22.7	26.2	31.2	35.6
40～44	2.8	2.4	1.9	2.0	2.8	4.7	11.8	16.5	18.7	22.7	28.6
45～49	2.3	1.8	1.5	1.4	1.9	3.1	6.8	11.3	14.8	17.6	22.5
50～54	2.0	1.5	1.4	1.1	1.5	2.1	4.4	6.7	10.3	14.4	17.8
55～59	1.8	1.4	1.2	1.0	1.2	1.6	3.0	4.4	6.1	10.1	14.7
60～64	1.7	1.2	1.2	0.9	1.0	1.2	2.0	2.9	3.9	5.9	10.3
65～69	1.5	1.0	1.3	0.9	0.9	0.9	1.4	1.9	2.6	3.8	6.1
70～74	1.5	0.9	1.4	0.9	0.9	0.8	1.0	1.4	1.7	2.4	3.8
75～79	1.4	0.9	2.0	1.0	0.9	0.7	0.8	1.0	1.2	1.6	2.4
80～84	1.2	0.7	} 2.0	1.0	1.1	0.7	0.7	0.8	0.9	1.1	1.6
85歳以上	1.5	0.7		1.1	1.2	0.7	0.7	0.8	0.8	0.9	1.0

総務省統計局『国勢調査報告』による。年齢別人口(配偶関係不詳を除く)に占める割合。1)沖縄県を含まない。2)15歳以上。

出典：国立社会保障・人口問題研究所編 2013年『人口統計資料集 2013年度版』。

表 9 性別生涯未婚率および初婚年齢（SMAM）：1920～2010年

年次	男		女		年次	男		女	
	生涯未婚率 (%)	初婚年齢 (歳)	生涯未婚率 (%)	初婚年齢 (歳)		生涯未婚率 (%)	初婚年齢 (歳)	生涯未婚率 (%)	初婚年齢 (歳)
1920	2.17	25.02	1.80	21.16	1970	1.70	27.46	3.34	24.65
1925	1.72	25.09	1.61	21.18	1975	2.12	27.65	4.32	24.48
1930	1.68	25.77	1.48	21.83	1980	2.60	28.67	4.45	25.11
1935	1.65	26.38	1.44	22.51	1985	3.89	29.57	4.32	25.84
1940	1.74	27.20	1.46	23.33	1990	5.57	30.35	4.33	26.87
1950	1.45	26.23	1.35	23.61	1995	8.99	30.68	5.10	27.69
1955	1.18	27.05	1.47	24.69	2000	12.57	30.81	5.82	28.58
1960	1.26	27.44	1.88	24.96	2005	15.96	31.14	7.25	29.42
1965	1.50	27.41	2.53	24.82	2010	20.14	31.18	10.61	29.69

総務省統計局『国勢調査報告』により算出。SMAM (Singulate mean age at marriage)は、人口静態統計の年齢別未婚率から計算する平均初婚年齢であり、次式により計算する。SMAM=($\sum Cx-50 \cdot S$)/(1-S)。ただし、Cxは年齢別未婚率、Sは生涯未婚率。生涯未婚率は、45～49歳と50～54歳未婚率の平均値であり、50歳時の未婚率。

出典：国立社会保障・人口問題研究所編 2013年『人口統計資料集 2013年度版』。

「嫡出でない子の割合」が非常に少ない（表4）わが国では、女性の未婚者割合の増加（表7）、つまり「未婚化」が「少子化」の主因と考えられる。「未婚化」が更に進行していけば、「非婚化」（表9）が進行し、「再生産」に係らない人達が多くなって行く。

また、初婚年齢に上昇つまり「晩婚化」に伴う出産年齢の上昇は、「第3子出生」を減少させ、ついで「第2子出生」へと影響していく。平均初婚年齢が「30歳」に近づいてきており、同世代の約半数の女性は30歳以降に「再生産」を行うことになる。「晩産化」が更に進行していけば、不妊治療が増加していく。

III 家族の変化

- 第二次大戦前 ← きょうだい4人、5人、多い人では7人から8人。
← 避妊の実践なし。
← 有配偶女性が再生産年齢期間を通して子ども生んでいた時代。
→ 長男以外の男性は就職や進学により成長すると自立。女性は結婚により離家。
きょうだい数という人口圧力により、経済的に独立するか、他家あるいは夫へと経済的に依存する相手に移行

1940年代末の第一次ベビーブーム以降、1960年代へ至る10年間

- 高出生から低出生へ出生力転換を達成。
- 合計出生率は、次世代の人口規模を親の世代と同じ規模に保つために必要な「人口置換水準（2.08）」まで低下。
- いわゆる「二子規範」が世帯構成の主流。

この時期から1970年代入るまでの期間

- わが国の経済が急速に発展。
- 世帯収入の改善や生活水準の上昇、子どもの教育水準の上昇などが進展。
- 専業主婦割合も増加（『平成13年度版 国民生活白書』）
全有配偶女性に占めるサラリーマン世帯の専業主婦の割合は、1955年に29.9%であったが、高度経済成長とともに増加し、1960年に33.2%、1965年に36.3%、1970年に36.4%まで上昇。
- 父が主たる働き手で、母が専業主婦、そして子どもが2人という、いわゆる「標準世帯」が家族の一般的な形態

こうした時代が、1960年頃から80年に至る時期まで続く

- 勤労世帯に対しての配偶者控除、扶養手当、年金、健康保険等の金額や保険料の算出のモデルケースとなる世帯構造。
- 戦後のわが国の家族の基本的なイメージを形成し「戦後家族」（落合、2002）と呼ばれた家族類型。

戦後社会の大きなターニングポイント → 1973年のオイルショック

- 1973年10月に第四次中東戦争が勃発。
- 石油輸出国機構（OPEC）に加盟していた産油国が原油価格の引き上げ。
- 列島改造ブームによる地価高騰などでインフレが進行していた日本経済は、このオイルショックにより物価高騰に拍車がかかり、「狂乱物価」というような状況に陥ってしまった。
- わが国経済をこれまで引っ張ってきた製鉄や造船という「重厚長大」型の産業に陰りが見え始め、次第に「軽薄短小」型のハイテク型の産業や、「サービス」型の産業に産業構造が移行。
- 経済的な環境の変化は、わが国の家族の在り方にも影響をもたらすようになってきた。

「戦後家族」の変化 → 「父親がブレッドウィナーであり、母親は家事労働の専従」からの変化

- ← 産業構造の転換により、これまで優位を保ってきた男性の稼得能力が変化。
- ← 熟練性や年功を必要としないサービス産業の隆盛により、男性の相対的経済的地位が低下し、「重厚長大」型産業ではリストラが発生（上野，1994）。
- ← 家計補助的に母親が拡大されたサービス産業の労働市場に参入し、パートタイム就業を行うようになった。
- ← しかし、家庭内の性別役割分業に関しては、母親は家事労働のほとんどを担う。
- 労働統計上はパートタイム就労という労働力でありながら、所得税控除や家族扶養手当が受給できる範囲内での雇用調整を行い、家庭内では専業主婦としての役割の二役を演じるという、いわゆる「準専業主婦」（落合，2004）。



こうした状況を背景に、全有配偶女性に占めるサラリーマン世帯の専業主婦の割合は、その後1980年に37.1%まで増加しそれをピークに、1990年には28.1%、2000年には26.5%まで減少（経済企画庁，2001）。

第2次ベビーブーム → 1971年から1974年までの期間に、1940年代末に毎年270万人が生まれた第1次ベビーブーム世代の女性達

が、年間約 200 万人の子どもを生む。

→ しかし 1973 年を境にわが国の出生率は、「人口置換水準」を割り込み、以降継続的に低下し続ける。

1970 年代中頃以降、女性の高学歴化も急激に進展

→ 1970 年から 1975 年の間に期間に女子の短大進学率は 11.2%から 20.2%に、大学学部への進学率は 6.5%から 12.7%へと急激に上昇した（文部科学省、2008）。

→ 1985 年には男女雇用機会均等法が制定され女性の就業機会はより一層拡大。

→ 経済的自立が可能であっても、少子社会ゆえに親との同居が許される時代となったのである。こうした状況のもと彼女たちは、結婚相手選択に十分に時間をかけることが可能となった（安藏、2008）。

1980 年代後半 ← 不動産や株式などの資産価格が投機などによって異常に上昇したバブル経済の時代が到来。

→ 高等教育への進学の上昇、大企業による新卒者の大量採用、大幅な賃金の上昇が起こった。

→ 未婚化は大きく進展。

→ 1980 年代半ばを境にわが国の未婚化、晩婚化、非婚化が大きく進行。

結婚行動の変化 ← 青年層を取り巻く家族の在り方が大きく影響

← 母親の多くがパートタイム労働に従事するようになっても、家庭内の役割は専業主婦であり、父親は家計の主たる稼得者として朝から夜まで家をあけることになる。

← 「二子規範」ゆえに、戦前のような家庭内人口圧力もない。

← 成人後も父親の経済環境の中で生活し、母親から家庭サービスを享受し続けていくことが成人子にも可能な状態。

← 1995 年の国勢調査によると、20 歳から 39 歳の未婚男性の 62.7%が、未婚女性の 74.2%が親と同居（総務省統計局、2000）。

← 未婚男性と未婚女性にとっては、母親から居心地の良い家庭サービスを受けることができ、経済的には父親から援

助を受けることができる理想的な環境。

- ← 男性は母親のような伝統的役割分担を行ってくれる女性を求め、更に加齢し、経済的に社会的にも地位が高くなるにつれ、よりそうした考えを強くしていく。
- ← 女性もまた、自分の両親が与えてくれるような経済環境と家庭サービスを提供し、あるいは協力して自分たちの家庭を築いてくれるような男性を求める。
- ← 加齢し経済的に自立できるようになれば、より一層、理解ある男性を求めることになる。こうした男女の結婚観や価値観の乖離が結婚を躊躇させることとなる（安藏，2008）。

IV 「いい人」がない — 男女間における結婚に関する意識の相違 —

より良い結婚 ← 理想的な結婚相手 (Assortative Mating), 満足いく結婚 (Satisfactory Marital Match), 良縁 (Good Match)



同質的な特質をもつ相手を選ぶ傾向。

- ← 社会生物学的同質性 (Socio-biological Homogamy) → 年齢や人種
- サブ・カルチャーとしての同質性 (Sub-cultural Homogamy) → 民族性や言語
- 社会経済的同質性 (Socioeconomic Homogamy) → 社会経済的地位や所得, 教育水準など



- ・ 男女双方, ときには双方の両親の類似した特質を有する人を求める傾向。
- ・ 互いの補完的の価値観が一致したしていることが必要。
- ・ もし両者の間に異質性が存在するならば, それを調整。



結婚後の適応的社会化 (Adaptive Socialization) が求められる。



適応的社会化が不可能 → よりよい相手を求め結婚相手選択過程により時間をかける傾向がある。



結婚が延期される。

【男女の結婚に関する価値観と適応的社会化の検証】

<データ>

東京都品川区企画部と少子化研究会が厚生労働科学研究費の助成をうけて実施（2002年12月から2003年1月）
「少子化に関する区民調査」（夫婦票659票，独身者票520票）

独身票のうち未婚者のみのデータを抽出 → 男女の結婚観の相違をみる

品川区 → 男女とも教育水準・所得水準が他の地域と比較して非常に高い
女性の回答者全体の43.9%が大学を卒業
20歳から24歳では在学中のものを含め50.0%（男性：75.0%）
20歳代後半では47.7%（男性：61.7%）
30歳代前半で37.5%（男性：65.9%）
30歳代後半で40.0%（男性：57.6%）

国立社会保障・人口問題研究所編 2012年 『第14回出生動向基本調査 結婚と出産に関する全国調査 独身者調査の結果概要』では、
男性の86.3%，女性の89.4%が「いずれは結婚するつもり」
これに対し、「一生結婚するつもりはない」と回答したのは、男性の9.4%，女性の6.8%であった。

しかし、品川区で男女別・年齢別にみた結婚に対する意思是、

表 10 男女別・年齢別の結婚に対する意志（品川区調査）

質問：あなたの結婚に対するお考えは、次のうちのどれですか。

		回答者数	できればすぐに でも結婚したい	いずれは 結婚したい	このまま 独身でいたい
男性	20～24歳	100%(標本数39)	7.7%	92.3%	0.0%
	25～29歳	100%(標本数61)	16.1%	70.5%	13.1%
	30～34歳	100%(標本数39)	20.5%	71.8%	7.7%
	35～39歳	100%(標本数34)	14.7%	76.5%	8.8%
	40～44歳	100%(標本数16)	18.8%	50.0%	31.3%
	45～49歳	100%(標本数14)	7.1%	71.4%	21.4%
	総数	100%(標本数20)	14.8%	74.4%	10.8%
女性	20～24歳	100%(標本数66)	13.6%	83.3%	3.0%
	25～29歳	100%(標本数87)	18.4%	74.7%	6.9%
	30～34歳	100%(標本数48)	8.3%	70.8%	20.8%
	35～39歳	100%(標本数44)	13.6%	61.4%	25.0%
	40～44歳	100%(標本数14)	14.3%	42.9%	42.9%
	45歳以上	100%(標本数16)	12.5%	62.5%	25.0%
	総数	100%(標本数27)	14.2%	71.6%	14.2%

注：少子化研究会企画・分析，品川区・少子化研究会共同実施，2002年，
「少子化に関する区民調査」独身者票から作成。

表 11 男女別・年齢別の結婚してもよいと思う手取り月収(品川区調査)

質問：あなたは、配偶者と自分の収入を合わせて、手取りでどのくらいあれば結婚してもよいと思いますか。

	回答者数	20万円 未満	20～30万 円未満	30～40万 円未満	40～50万 円未満	50～60万 円未満	60～70万 円未満	70万円 以上	わから ない
男性 20～24歳	100%(標本数38)	-	13.2%	26.3%	21.1%	13.2%	5.3%	10.5%	10.5%
25～29歳	100%(標本数53)	-	11.3%	37.7%	24.5%	13.2%	-	5.7%	7.5%
30～34歳	100%(標本数36)	2.8%	5.6%	36.1%	25.0%	16.7%	-	2.8%	11.1%
35～39歳	100%(標本数31)	-	12.9%	38.7%	25.8%	9.7%	-	3.2%	9.7%
40歳以上	100%(標本数21)	-	4.8%	33.3%	42.9%	9.5%	-	4.8%	4.8%
総数	100%(標本数179)	0.6%	10.1%	34.6%	26.3%	12.8%	1.1%	5.6%	8.9%
女性 20～24歳	100%(標本数64)	-	3.1%	21.9%	31.3%	20.3%	6.3%	3.1%	14.1%
25～29歳	100%(標本数80)	-	6.3%	20.0%	23.8%	27.5%	8.8%	3.8%	10.0%
30～34歳	100%(標本数37)	-	2.7%	10.8%	27.0%	18.9%	24.3%	0.0%	16.2%
35～39歳	100%(標本数33)	-	3.0%	9.1%	27.3%	15.2%	15.2%	18.2%	12.1%
40歳以上	100%(標本数20)	-	-	5.0%	40.0%	15.0%	15.0%	5.0%	20.0%
総数	100%(標本数275)	-	3.8%	16.2%	28.2%	21.4%	12.0%	5.1%	13.2%

注：少子化研究会企画・分析，品川区・少子化研究会共同実施，2002年，「少子化に関する区民調査」独身者票から作成。

表 12 生き方や考え方に関する質問についての主成分分析結果（品川区）

質 問 項 目	主成分行列		バリマックス回転後	
	第1主成分	第2主成分	第1主成分	第2主成分
問15-a 夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ	0.719	-0.221	0.701	0.272
問15-b 子どもが小さいうちは、母親は育児に専念すべきだ	0.679	-0.149	0.625	0.304
問15-c 年をとった親は子どもが面倒をみるべきだ	0.512	0.310	0.210	0.560
問15-d 男女と一緒に暮らすなら結婚すべきだ	0.619	0.477	0.190	0.758
問15-e 子どもは法的に結婚した夫婦の間で生まれるべきだ	0.556	0.508	0.122	0.743
問15-h 男性も身の回りのことや家事をするべきだ	0.345	-0.338	0.480	-0.052
問15-i 一生独身でいるより、結婚したほうが良い	0.470	0.523	0.045	0.701
問15-j 夫に十分な収入がある場合、妻は仕事を待たないほうが良い	0.629	-0.381	0.729	0.091
問15-k 妻にとって、自分の仕事をもつよりも夫の仕事の手助けをする方が大切	0.698	-0.314	0.743	0.186
問15-l 母親が働くと、小学校にあがる前の子どもに良くない影響を与える	0.654	-0.223	0.652	0.230

注：少子化研究会企画・分析，品川区・少子化研究会共同実施，2002年，「少子化に関する区民調査」独身者票から作成。

表 13 伝統的性別役割と伝統的結婚観に関する男女の差（品川区調査）

	年齢	男 性			女 性		
		平均値	標準偏差	回答者数	平均値	標準偏差	回答者数
伝 統 的 性 別 役 割	20-24歳	-0.067	0.786	39	-0.085	0.981	65
	25-29歳	0.155	1.109	61	-0.044	0.934	91
	30-34歳	0.213	0.951	42	-0.366	0.933	57
	35-39歳	0.312	0.974	34	-0.109	1.021	46
	40-44歳	0.354	1.287	18	-0.308	1.000	16
	45-50歳	0.781	0.946	17	-0.228	0.887	20
	全年齢	0.218	1.018	211	-0.152	0.959	295
伝 統 的 結 婚 観	20-24歳	0.004	0.981	39	0.205	0.857	65
	25-29歳	0.034	1.017	61	0.094	0.930	91
	30-34歳	0.037	1.038	42	-0.271	1.058	57
	35-39歳	0.196	0.978	34	-0.162	1.000	46
	40-44歳	-0.450	1.248	18	-0.008	1.148	16
	45-50歳	-0.287	0.880	17	0.324	0.818	20
	全年齢	-0.012	1.023	211	0.018	0.969	295

注：少子化研究会企画・分析，品川区・少子化研究会共同実施，2002年，「少子化に関する区民調査」独身者票から作成。
平均値は，伝統的性別役割については第1主成分の，伝統的結婚観は第2主成分の固有値である。

【 男 性 】

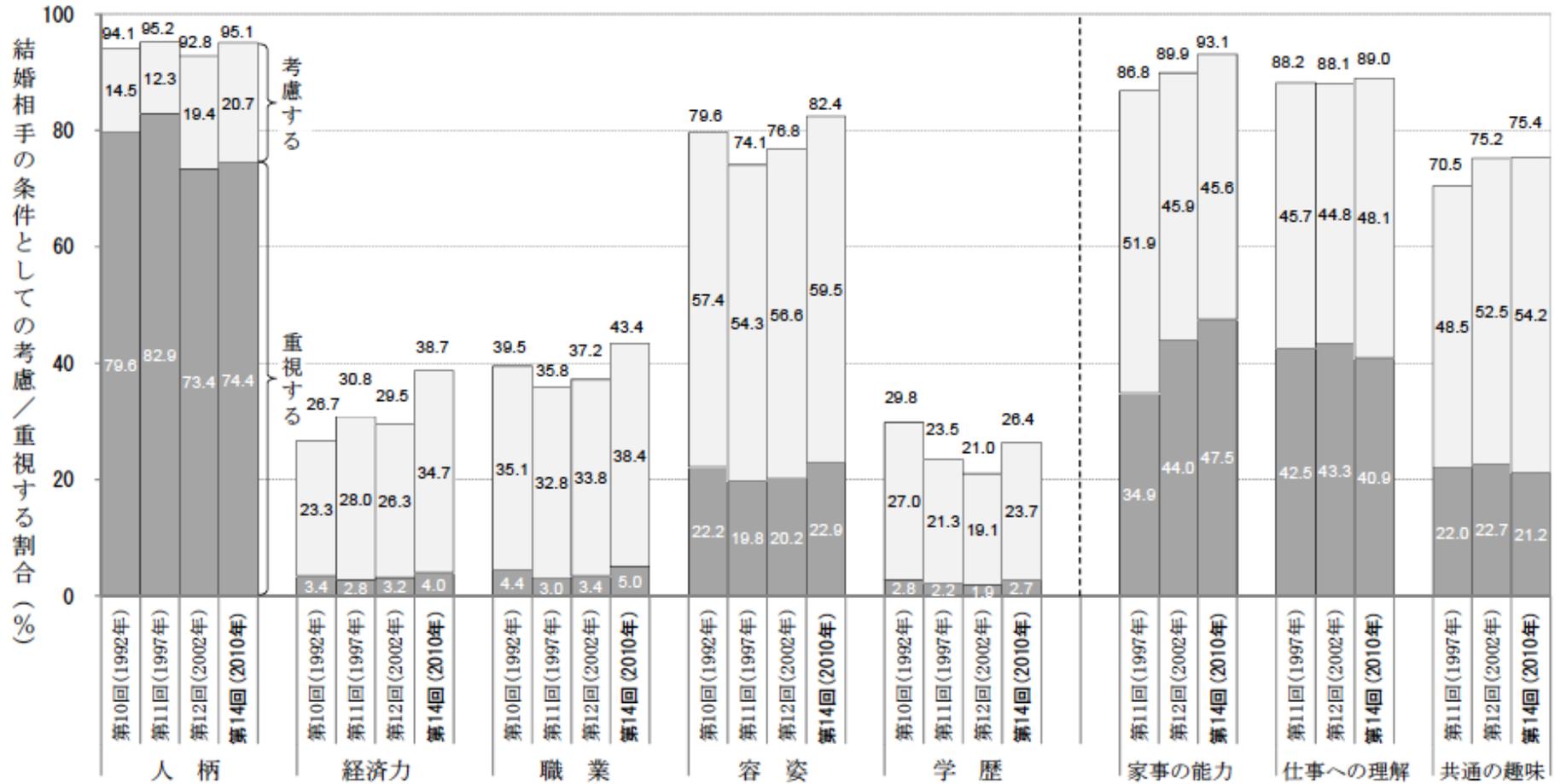
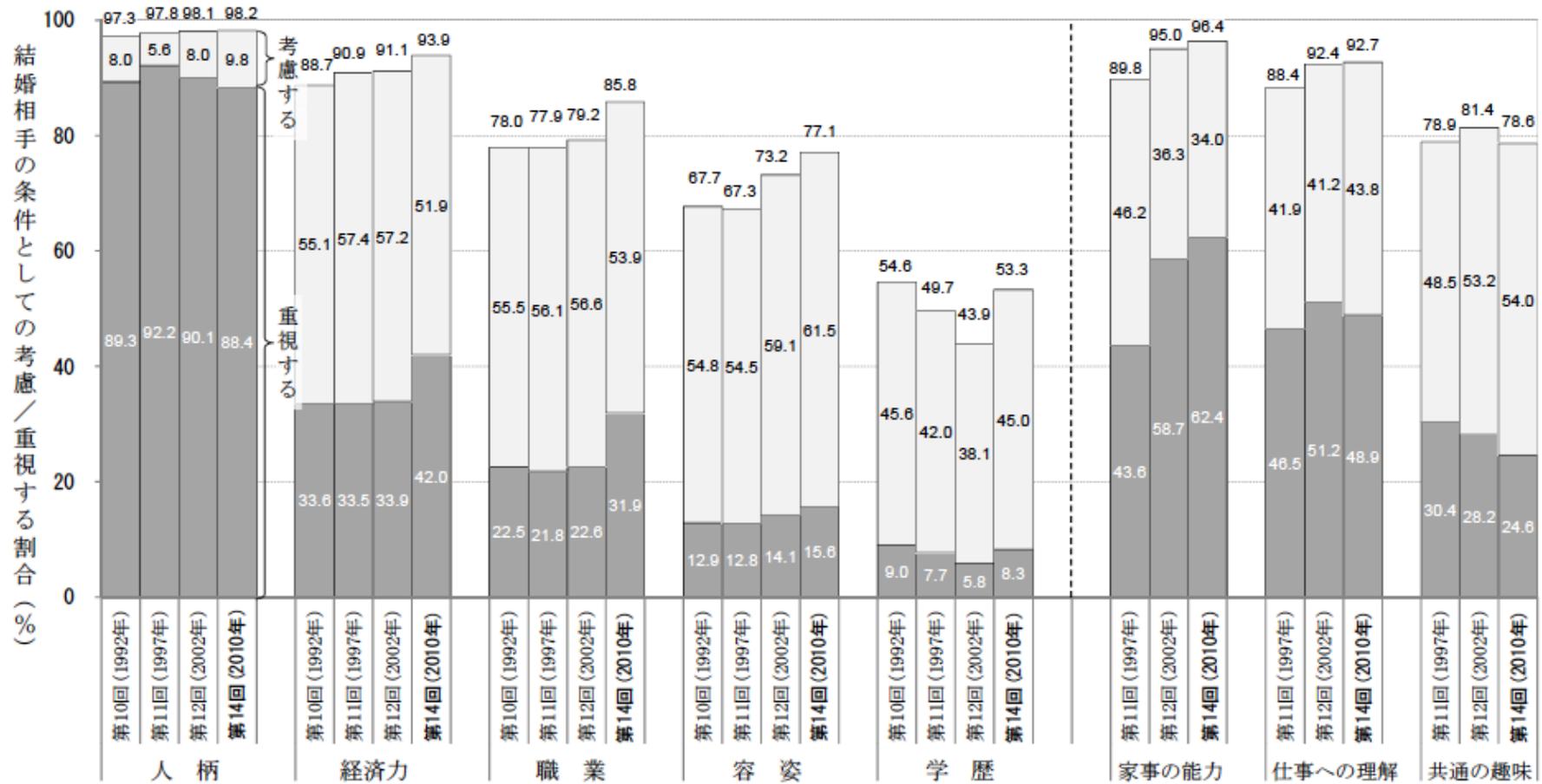


図5 調査別にみた、結婚相手の条件として考慮・重視する割合の推移（男性）

出典：国立社会保障・人口問題研究所編 2012年 『第14回出生動向基本調査 結婚と出産に関する全国調査 独身者調査の結果概要』12頁。

【 女 性 】



注：対象は「いずれ結婚するつもり」と答えた18～34歳未婚者。

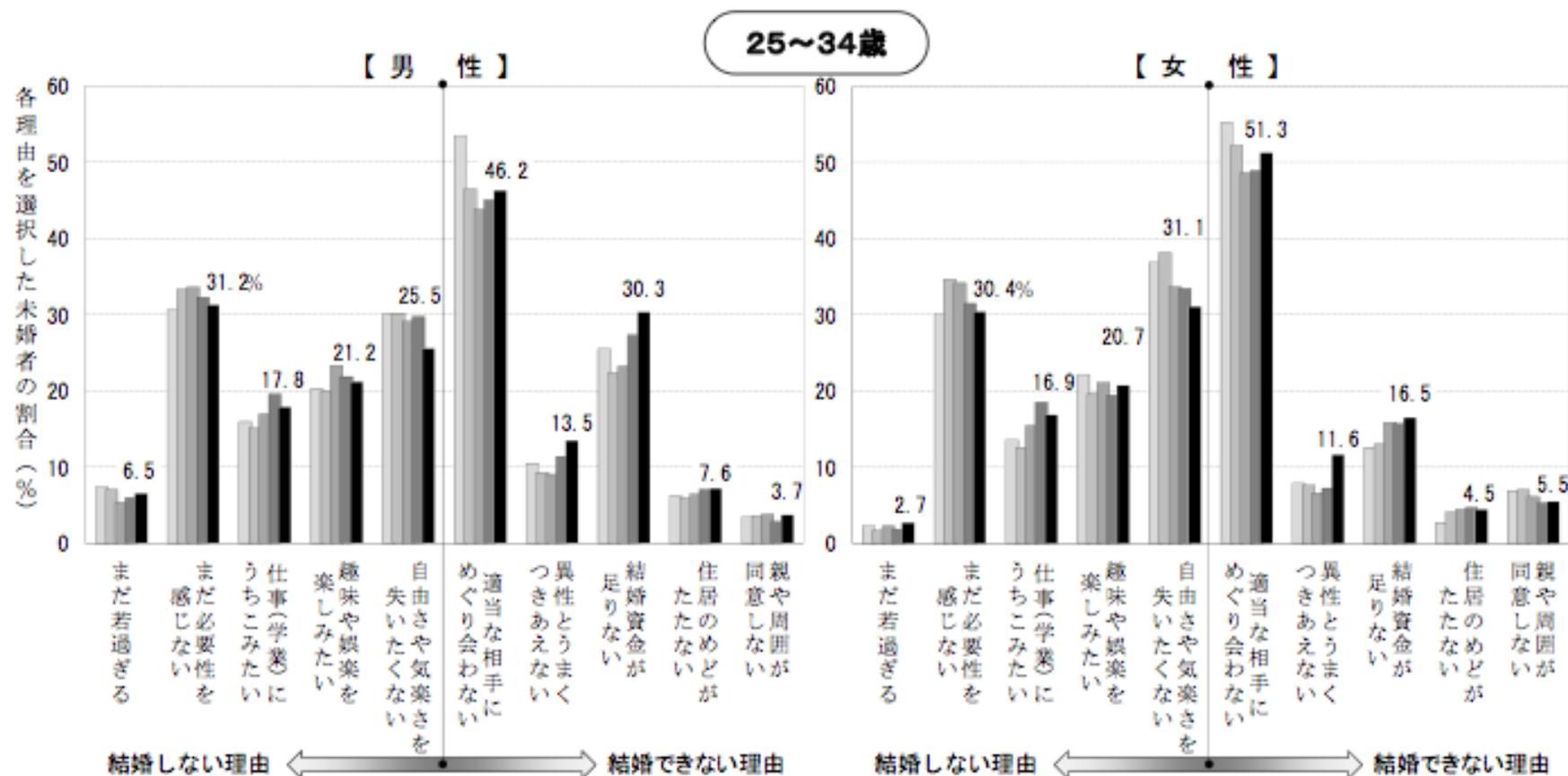
設問「あなたは結婚相手を決めるとき、次の①～⑧の項目について、どの程度重視しますか。それぞれあてはまる番号に○をつけてください。」

(1. 重視する、2. 考慮する、3. あまり関係ない)。

図6 調査別にみた、結婚相手の条件として考慮・重視する割合の推移（女性）

出典：国立社会保障・人口問題研究所編 2012年 『第14回出生動向基本調査 結婚と出産に関する全国調査 独身者調査の結果概要』12頁。

そして・・・



注：未婚者のうち何%の人が各項目を独身にとどまっている理由(三つまで選択)として挙げているかを示す。グラフ上の数値は第14回調査の結果。設問「あなたが現在独身である理由は、次の中から選ぶとすればどれですか。ご自分に最もあてはまると思われる理由を最高三つまで選んで、右の回答欄に番号を記入してください(すでに結婚が決まっている方は、「最大の理由」の欄に12を記入してください)。」

図7 調査・年齢別にみた、独身にとどまっている理由

出典：国立社会保障・人口問題研究所編 2012年 『第14回出生動向基本調査 結婚と出産に関する全国調査 独身者調査の結果概要』7頁。

V 結婚市場への対応

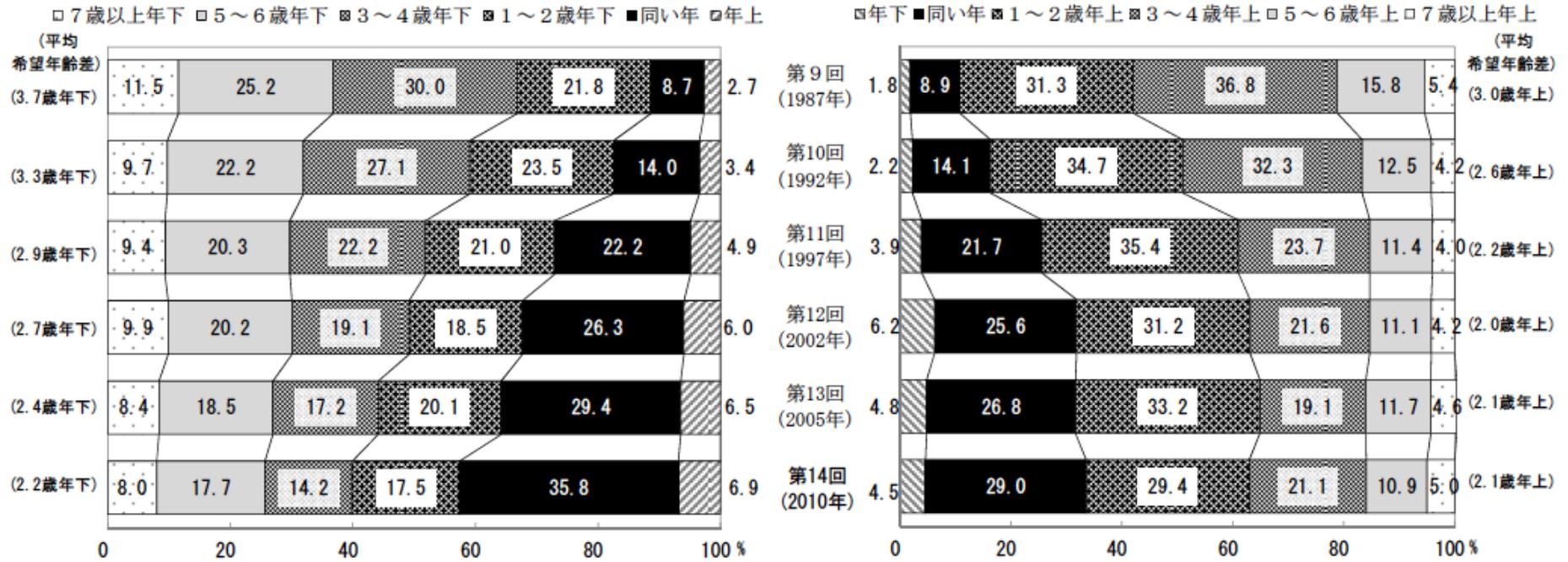
表 14 平均初婚年齢の推移：1899～2011年

年次	初 婚			年次	初 婚		
	夫	妻	年齢差		夫	妻	年齢差
1899	…	…	…	1980	27.8	25.2	2.6
1900	…	…	…	1981	27.9	25.3	2.6
1905	…	…	…	1982	28.0	25.3	2.7
1910	27.0	23.0	4.0	1983	28.0	25.4	2.7
1915	27.4	23.2	4.2	1984	28.1	25.4	2.7
1920	27.4	23.2	4.2	1985	28.2	25.5	2.7
1925	27.1	23.1	4.0	1986	28.3	25.6	2.7
1930	27.3	23.2	4.1	1987	28.4	25.7	2.7
1935	27.8	23.8	4.0	1988	28.4	25.8	2.6
1940	29.0	24.6	4.4	1989	28.5	25.8	2.6
1947	26.1	22.9	3.2	1990	28.4	25.9	2.5
1950	25.9	23.0	2.9	1991	28.4	25.9	2.5
1955	26.6	23.8	2.8	1992	28.4	26.0	2.4
1960	27.2	24.4	2.8	1993	28.4	26.1	2.3
1961	27.3	24.5	2.8	1994	28.5	26.2	2.3
1962	27.3	24.5	2.8	1995	28.5	26.3	2.2
1963	27.3	24.5	2.8	1996	28.5	26.4	2.1
1964	27.3	24.4	2.9	1997	28.5	26.6	1.9
1965	27.2	24.5	2.7	1998	28.6	26.7	1.9
1966	27.3	24.5	2.8	1999	28.7	26.8	1.9
1967	27.2	24.5	2.7	2000	28.8	27.0	1.8
1968	27.2	24.4	2.8	2001	29.0	27.2	1.8
1969	27.1	24.3	2.8	2002	29.1	27.4	1.8
1970	26.9	24.2	2.7	2003	29.4	27.6	1.8
1971	26.8	24.2	2.6	2004	29.6	27.8	1.8
1972	26.7	24.2	2.5	2005	29.8	28.0	1.8
1973	26.7	24.3	2.4	2006	30.0	28.2	1.8
1974	26.8	24.5	2.3	2007	30.1	28.3	1.8
1975	27.0	24.7	2.3	2008	30.2	28.5	1.8
1976	27.2	24.9	2.3	2009	30.4	28.6	1.8
1977	27.4	25.0	2.4	2010	30.5	28.8	1.7
1978	27.6	25.1	2.5	2011	30.7	29.0	1.7
1979	27.7	25.2	2.5				

厚生労働省統計情報部『人口動態統計』による。1947～72年は沖縄県を含まない。1940年以前は届出時の年齢、1947～67年は結婚式を挙げたときの年齢、1968年以降は結婚式を挙げたとき、または同居を始めたときの早い方の年齢。同居（挙式）年と届出年が同じものについてのみ。

【男性】

【女性】



注：対象は「いずれ結婚するつもり」と答えた18～34歳未婚者(希望結婚年齢不詳を除く)。希望する結婚相手との年齢差は、対象者が希望する、本人と相手の結婚年齢の差。不詳を除く構成。図の両端()内の数値は希望年齢差の平均値。なお、第14回(2010年)夫婦調査による実際の夫妻年齢差(調査時点より過去5年間に結婚した夫婦)は1.7歳であった。

図8 調査別にみた、結婚相手との希望年齢差の構成

出典：国立社会保障・人口問題研究所編 2012年 『第14回出生動向基本調査 結婚と出産に関する全国調査 独身者調査の結果概要』10頁。

ライフコースの説明：

専業主婦コース＝結婚し子どもを持ち、結婚あるいは出産の機会に退職し、その後は仕事を持たない

再就職コース＝結婚し子どもを持つが、結婚あるいは出産の機会にいったん退職し、子育て後に再び仕事を持つ

両立コース＝結婚し子どもを持つが、仕事も一生続ける

DINKSコース＝結婚するが子どもは持たず、仕事を一生続ける

非婚就業コース＝結婚せず、仕事を一生続ける

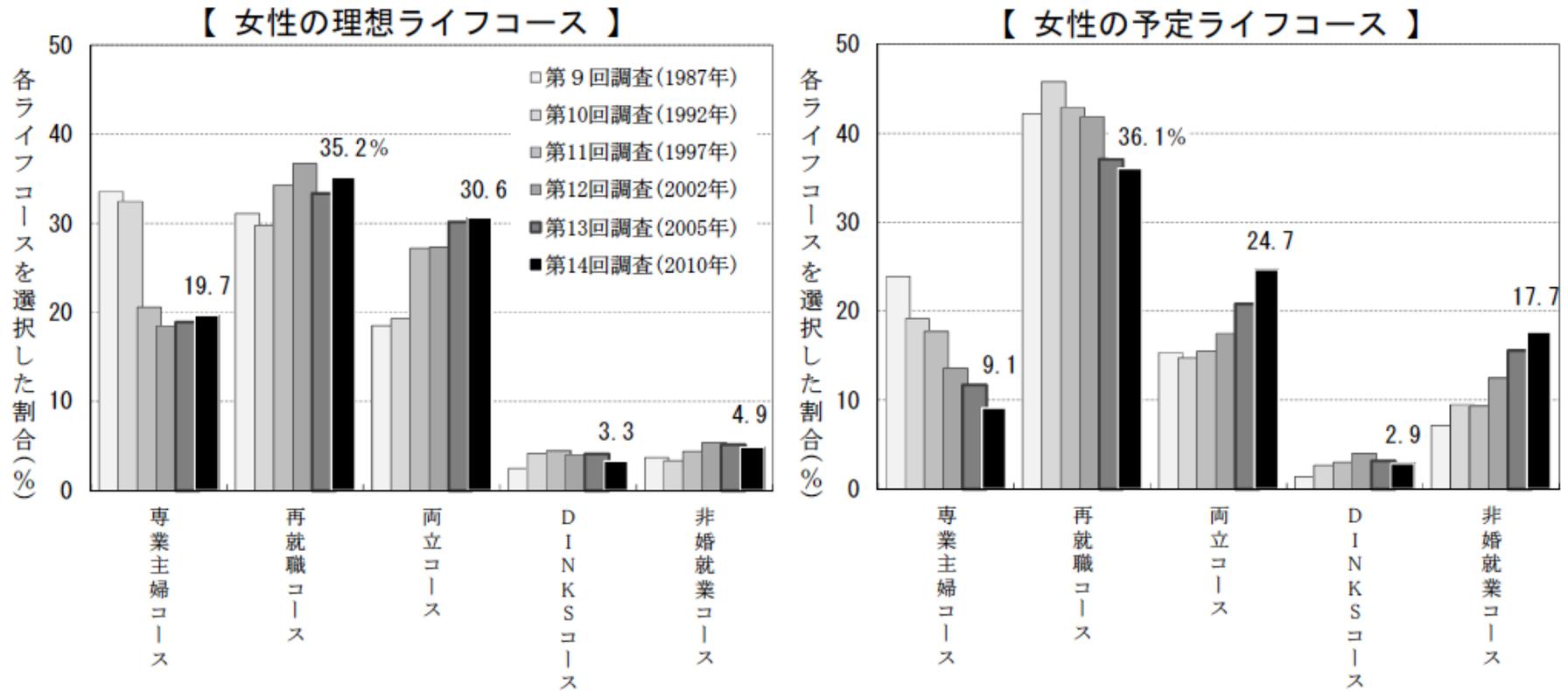


図9 調査別にみた、女性の理想・予定のライフコース

出典：国立社会保障・人口問題研究所編 2012年 『第14回出生動向基本調査 結婚と出産に関する全国調査 独身者調査の結果概要』11頁。

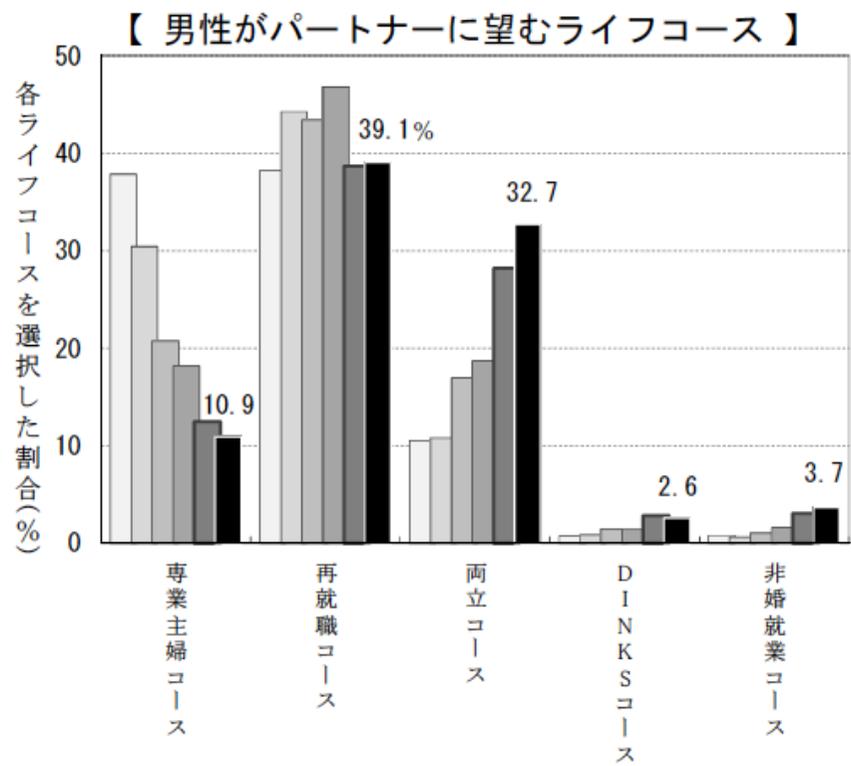


図 10 調査別にみた、男性が女性に望むライフコース

出典：国立社会保障・人口問題研究所編 2012年 『第14回出生動向基本調査 結婚と出産に関する全国調査 独身者調査の結果概要』11頁。

VI 求められる少子化対策

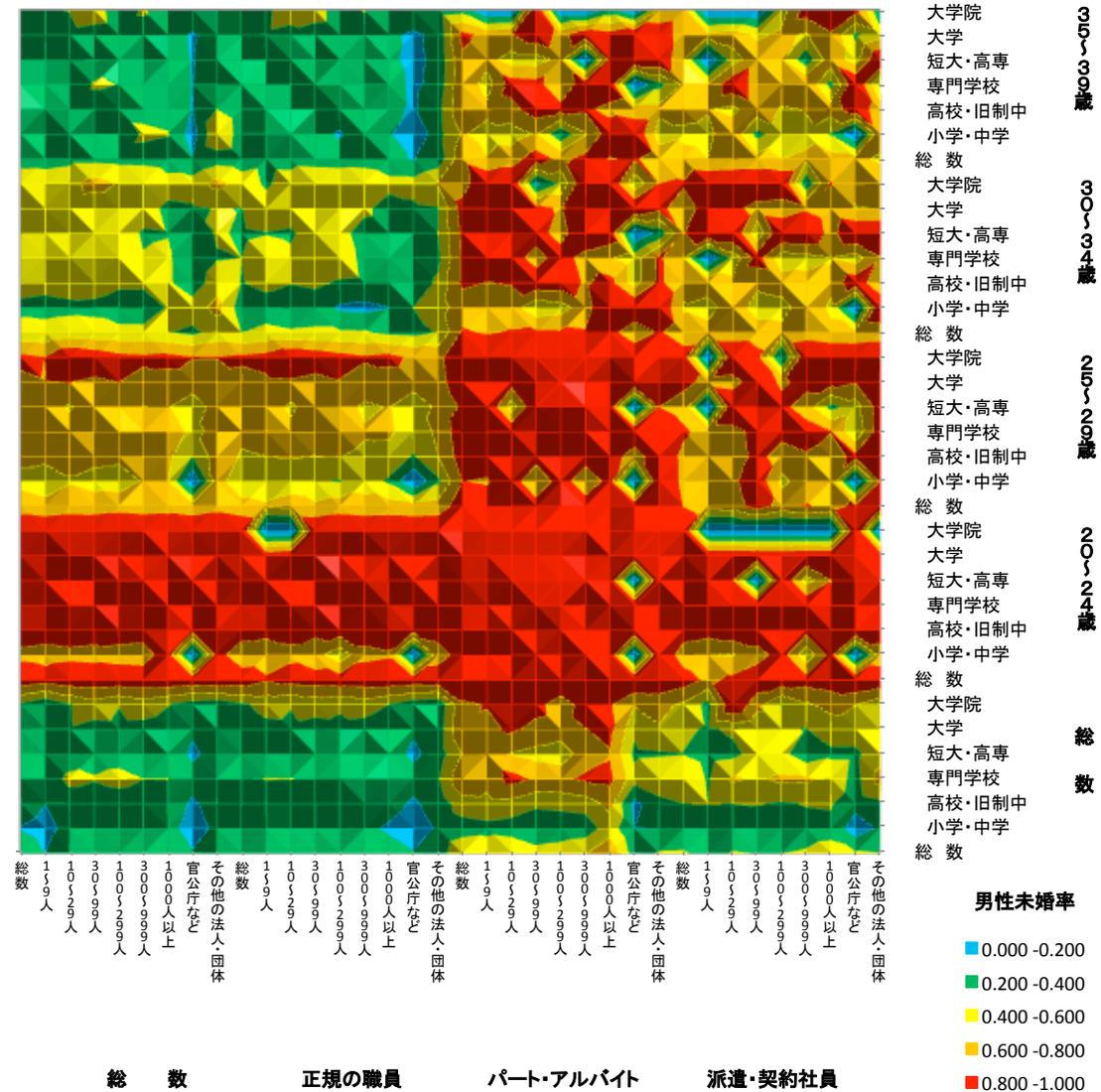


図 11 男性の年齢別（20-39 歳）、学歴別、就業別、従業員規模別未婚率（『平成 24 年就業構造基本調査』第 16 表から）

出典：鎌田健司(2012)「若者の就業行動と婚姻率の低下」小崎敏男，牧野文夫編著『少子化と若者の就業行動(人口学ライブラリー10)』原書房 pp.123-149.

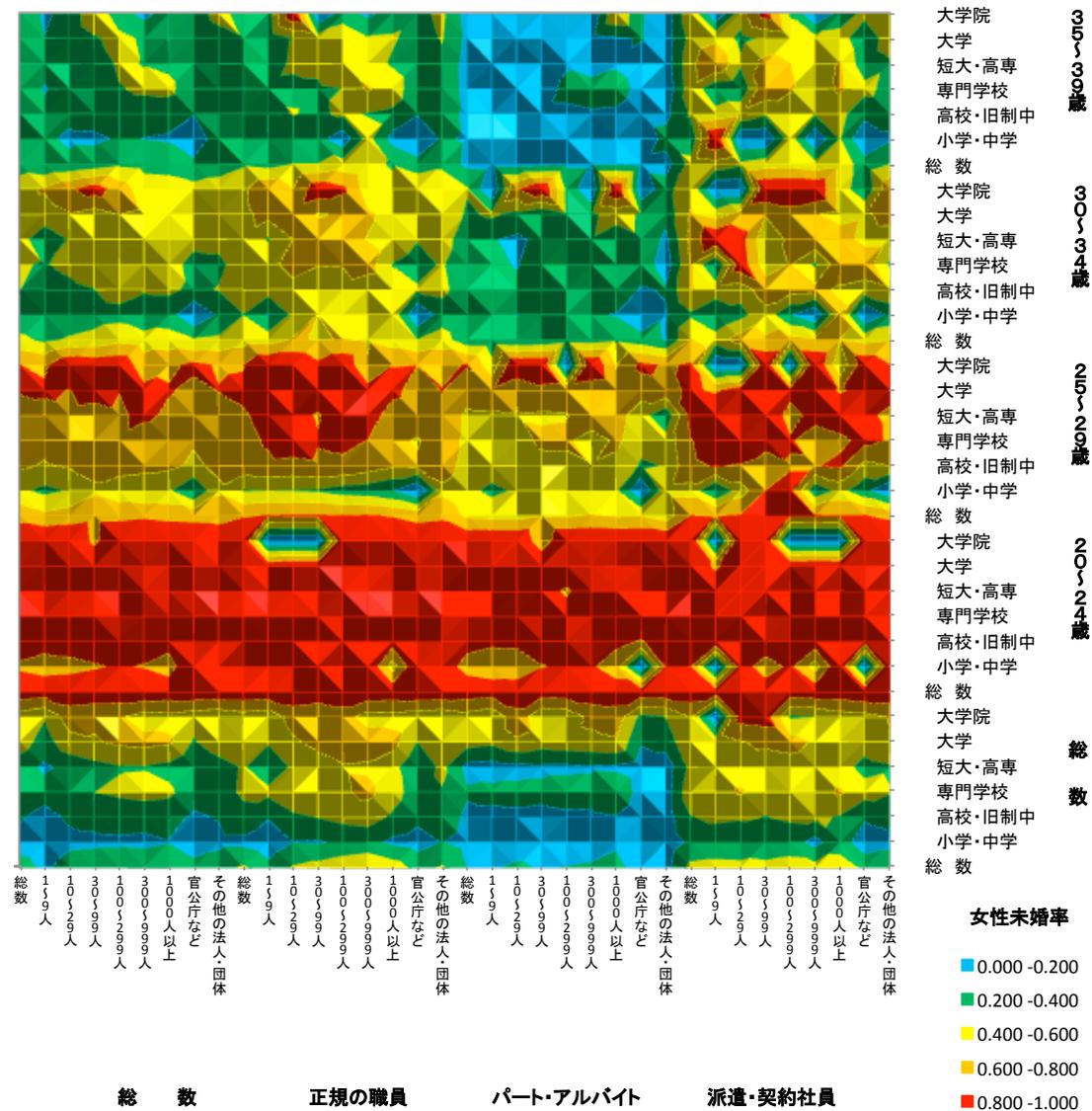


図12 女性の年齢別（20-39歳）、学歴別、就業別、従業員規模別未婚率（『平成19年就業構造基本調査』第14表から）

出典：鎌田健司(2012)「若者の就業行動と婚姻率の低下」小崎敏男，牧野文夫編著『少子化と若者の就業行動(人口学ライブラリー10)』原書房 pp.123-149.

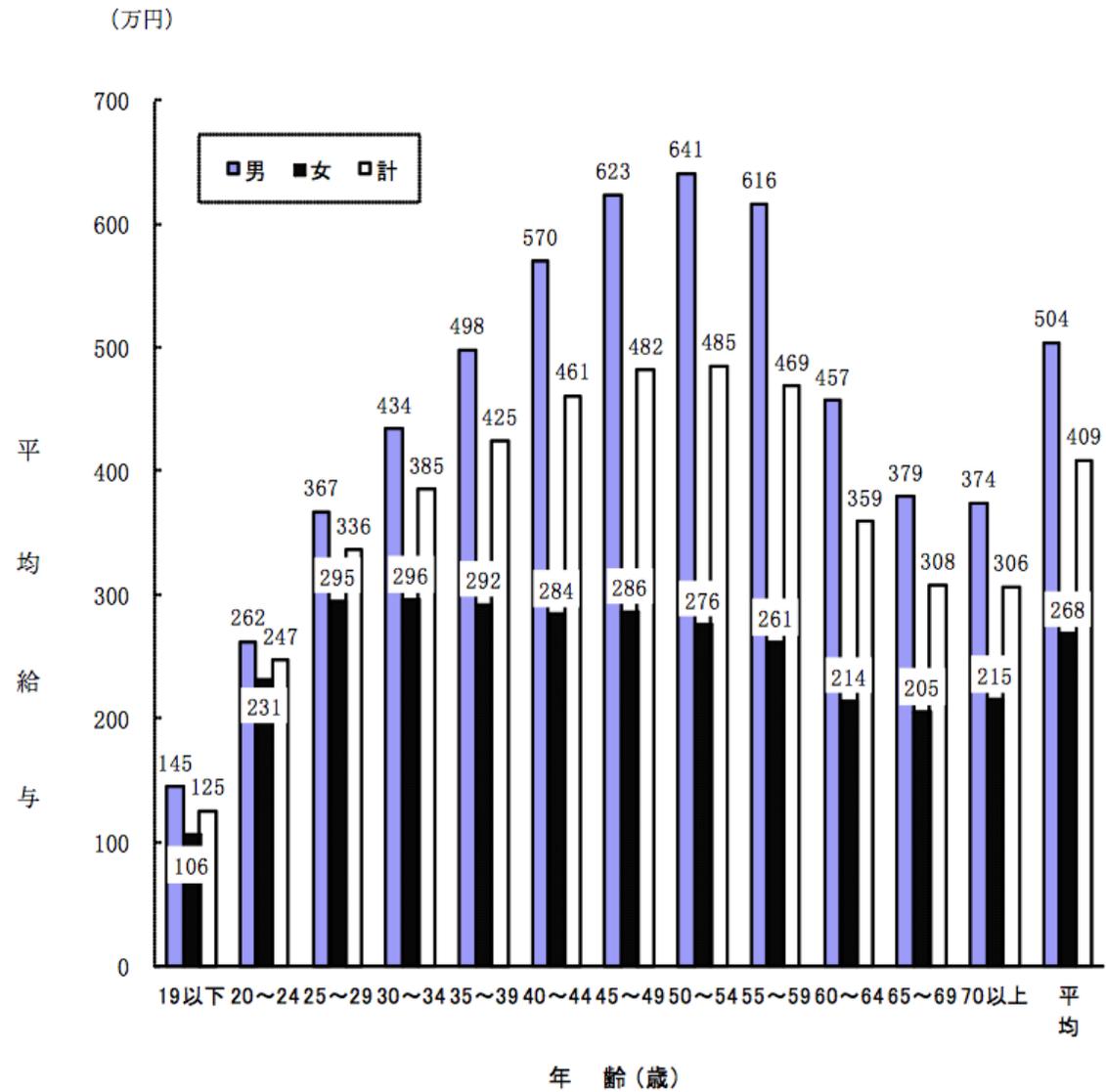


図 13 年齢階層別の平均給与（平成 23 年分）

出典：国税庁長官官房企画課 2012 年 『民間給与実態統計調査 -調査結果報告-』, 16 頁。

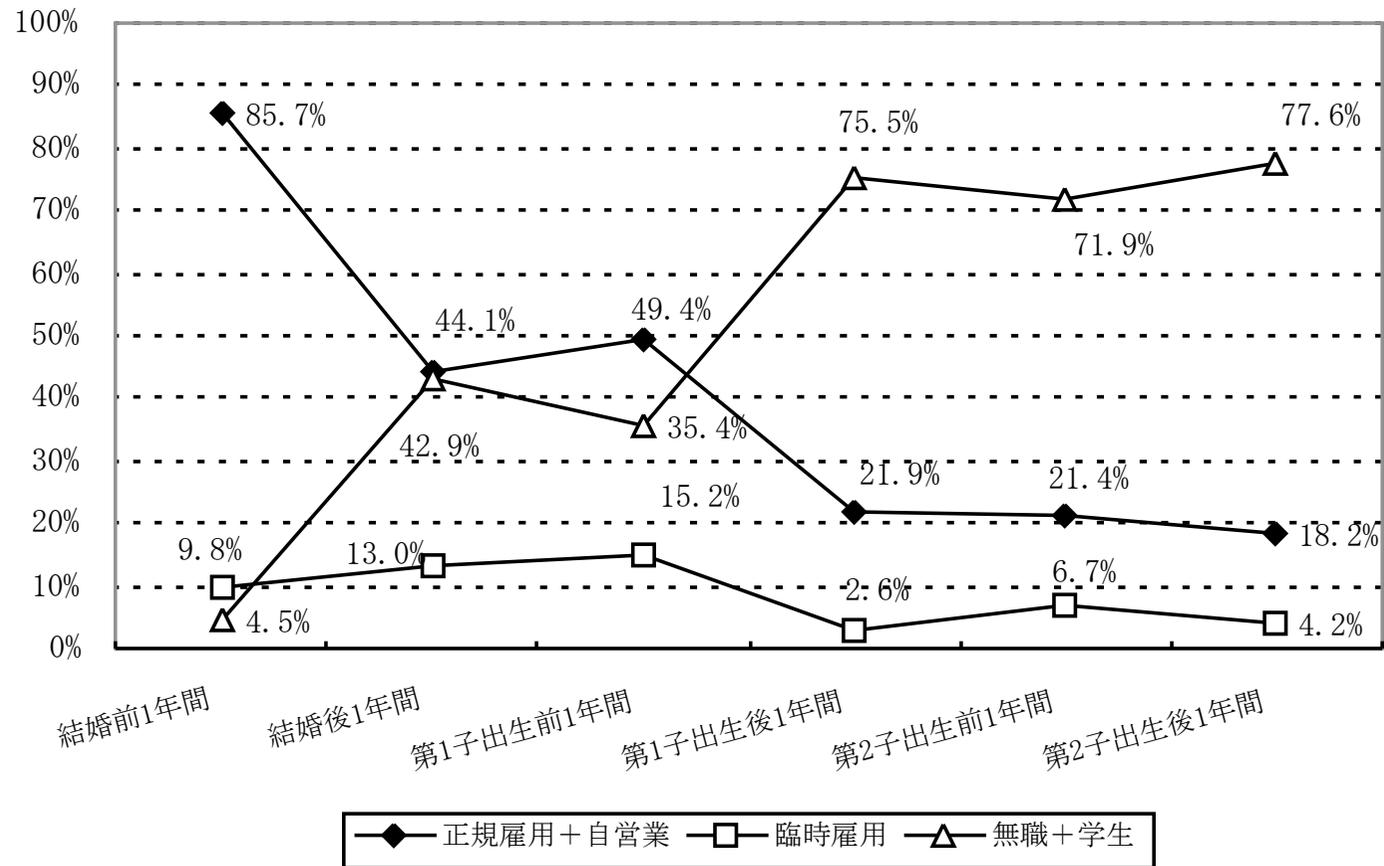


図14 6自治体における少子化調査において第2子出生まで回答している2270ケースのイベントごとの就業形態の変化
 (「少子化の見通しに関する一般調査」から、東京都品川区、千葉県印旛郡栄町、埼玉県秩父市、岐阜県多治見市、東京都八王子市、そして神奈川県秦野市の6自治体で、第2子出生を経験していると回答した人たちの結婚後の就業状態の変化を示した。)

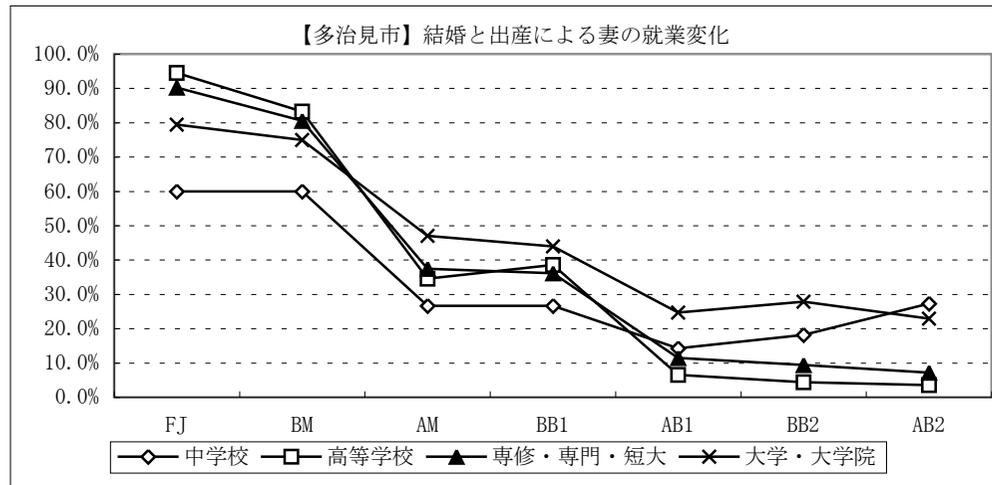
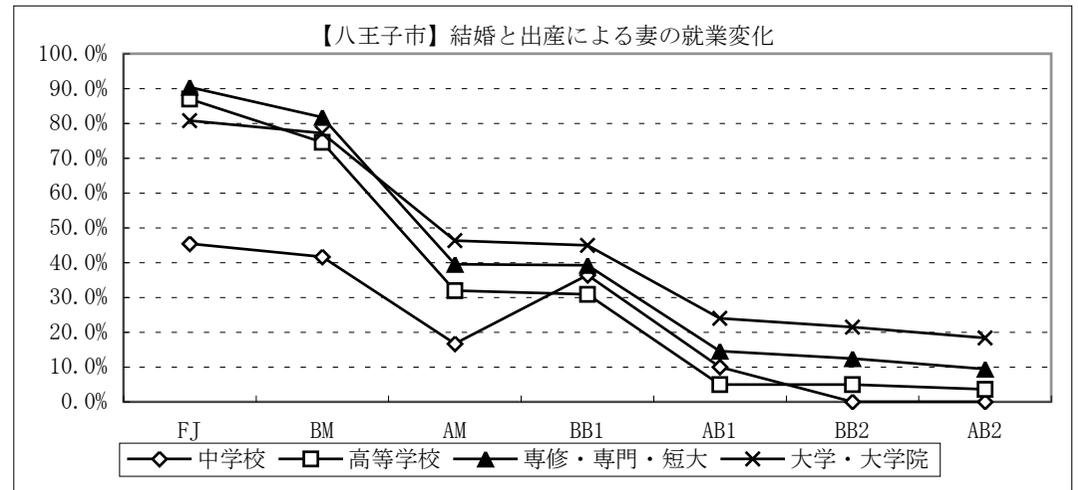
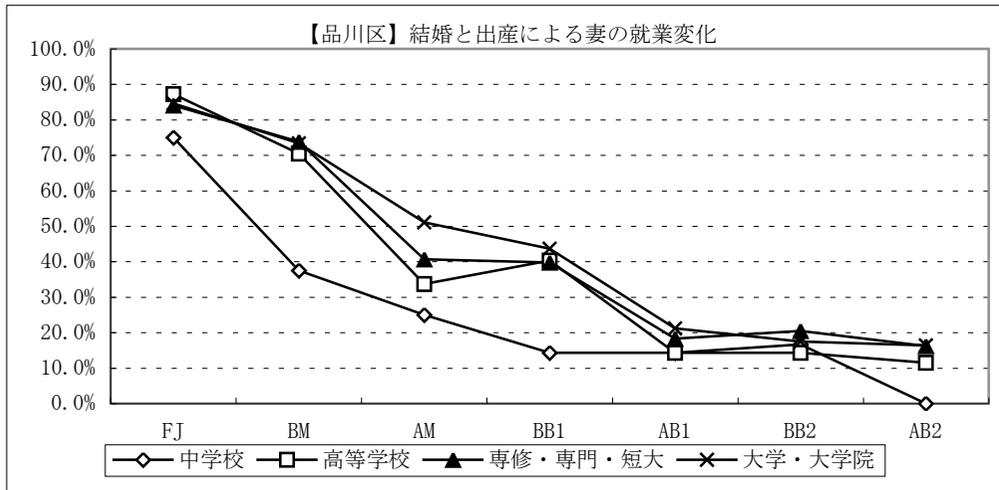


図 15 第 2 子出生まで回答している回答者のイベントごとの教育水準別就業形態の変化

注：就業は「企業・団体の職員」「民間の正社員」「官公庁の職員」といった正規就業を示しており、自営業やパート・派遣は除いている。

FJ：初職，BM：結婚前の 1 年間，AM：結婚後の 1 年間，BB1：第 1 子出生前の 1 年間，AB1：第 1 子出生後の 1 年間，BB2：第 2 子出生前の 1 年間，AB2：第 2 子出生後の 1 年間。

【再考】

因果関係成立のための三つの基準

Lazarsfeld. P. 1959. "Problems in Methodology." In Robert K. Merton (ed.) . *Sociology Today*, Basic Books, New York.

- (1) 原因となる事象が結果となる事象に**時間的に先行**する。
- (2) 原因となる事象と結果となる事象の間には**経験的相関関係（共変動）**が存在する。
- (3) 原因となる事象と結果となる事象の間に経験的相関関係が存在するとしても、そのどちらにも影響を及ぼす**第3の変数を統制**する必要がある。

- 1 「少子化」 ← 合計出生率が「人口置換水準（TFR=2.06）」を下回り、継続的に低下すること。
- 2 非嫡出児の出生割合は2%と非常に低い。98%の子どもは両親が結婚してから生まれる。
- 3 有配偶出生率は、「1965年生まれコホート以降に減少傾向」は見られるが、大きな減少はない。

↓

「晩婚化」・「晩産化」の影響 → 「不妊治療」の増加

↓

- 4 「理想子ども数」, 「追加予定子ども数」に大きな変化はなし。「完結出生児数」に若干の低下が見られる。
- 5 有配偶女性は「二子規範」を堅持の傾向。
- 6 「少子化」の原因は、第一に再生産年齢の女性の「未婚化」、第二に「晩婚化」・「晩産化」といえる。
- 7 「未婚化」・「晩婚化」・「非婚化」への変化は1980年代半ばからみられる。時代背景、家族の変化が影響か。
- 8 「未婚化」・「晩婚化」・「非婚化」の背景には、男女の結婚後の生活に関する考え方、価値観の相違が存在する。
- 9 経済的低迷、雇用状況の悪化、男性の収入の相対的悪化が、「結婚相手選択過程」を長期化。
- 10 女性にとっては、結婚後や第1子出産後の就業継続が困難な状況が改善されていない。

11 男女とも、「結婚市場の変化」を認識 → 男女の初婚年齢の収斂、「片働き」から「共働き」夫婦に。



12 未婚者が「共働き」をしながら、「家族形成」がしていくことができると感じる環境の整備。



13 多様な労働時間、労働環境の整備・導入 → 「育休」、「育短」、「在宅勤務」、「テレワーク」等の導入、普及。

14 「男女共同参画社会」の実現 → 男性の家事・育児参加、公的機関・地域社会による「育児支援」、「子育て」支援。
企業の「労働慣行」に対する認識の変化。

求められる「**少子化対策**」は、すでに結婚し子どもをもっている人達に対する「次世代育成支援」（「育児支援」や「待機児童問題」、「児童手当の増額」など）に議論にのみ重点をおくのではなく、



再生産期間の未婚（独身）女性が結婚し家族形成しやすくなる環境の整備。



結婚後の経済的安定と家族形成環境の確保の両立

結婚後の経済的安定 → 「片働き」から「共働き」へ。結婚・出産後の正規雇用の確保と安定、男女の非正規雇用の減少。

家族形成環境の確保 → 伝統的性別役割分業の再考、男性の自立、夫の家事・育児支援、地域社会と連動した育児支援、学
童保育の拡充、「親育て教育」の実施など → 男女共同参画社会の実現

リプロダクティブヘルスへのサポート → 出産年齢の高齢化に伴う不妊治療の支援、リプロダクティブヘルスに係る教育・
情報提供の実施。



国、自治体、企業、地域社会の連携